フランスにおける地域言語の推移と現状
―アルザス・アキテーヌ・ブルターニュを事例として―

三木　一彦*

La transition et la situation actuelle des langues régionales en France: l'étude des cas Alsace, Aquitaine et Bretagne

Kazuhiko MIKI

要旨　近年，ヨーロッパ諸国では，EU 統合が進展する中で，地域言語の存在に脚光が当てられつつある．本稿では，フランス国内におけるアルザス・アキテーヌ・ブルターニュの 3 地方を事例とし，それぞれの地域言語の沿革や現状について検討を行なった．

アルザス地方では，歴史的な経緯もあってアルザス語が多く使用され，近年では国境を越えた交流の進展とともに，アルザス語は一定の復権をみせている．一方，アキテーヌ地方ではオクシタン語とバスク語の使用がみられ，使用人口はオクシタン語の方が多いものの，存続傾向にあるのはむしろバスク語の方である．また，ブルターニュ地方ではブルトン語が存在し，その使用範囲は徐々に狭まってきていたが，最近ではブルトン語と地域主義運動との連関がみられる．全体として，長らく衰退傾向にあったフランスの地域言語は，現在，それぞれの地方における地域文化の核として徐々に見直されつつあるといえよう．

キーワード：フランス　地域言語　アルザス　アキテーヌ　ブルターニュ

Ⅰ　はじめに

今日，ヨーロッパでは，EU 統合が進展する中，言語に関して大きく二つの面での問題が生じている．その一つは，地域主義運動の浸透にともなう地域言語と国家語の関係である．これは EU によって主権国家の相対化が行なわれ，結果的に地域の自立性が高められたことと関連している[1]．もう一つの問題は，移民の流入にともなう外国語と国家語の関係である．1950 年以降，西ヨーロッパ諸国を中心に，大量の外国人労働者が流入し，それに反発するような移民排斥運動も各国で発生している[2]．

これらの問題は，フランスにおいても例外なく存在しており，地域言語問題の顕著な例としてはコルス（コルシカ）島の分離独立運動をあげることができる．また，外国からの移民も含め，フランスでは長らくフランス語の習得がフランス国民として不可欠の条件とされてきたが[3]，地域主義運動の活発化や移民の増加によって，1970 年代以降，「国民国家」フランスの危機と形容される状況が顕著となってきている[4]．

フランスでは，こうした状況に対する対応策の一環として，1999 年に国立統計経済研究所（略称 INSEE）が，地域言語や外国語の使用に関する調査を行なった．筆者は前稿において，本調査の結果を用いながら，アルザス地方における地域言語の現状について報告したが[5]，本稿では，それをうける形で，アルザス・アキテーヌ・ブルターニュの 3 地方（図 1）における地域言語の推移と現状を取り上げ，それぞれの地域性を抽出していきたい．これらの 3 地方で用いられてきた地域言語であるアルザス語・オクシタン語・ブルトン語の使用人口は，上記の調査において，フランスの地域言語中，第 1 ～ 3 位を占めている[6]．また，

*みき　かずひこ　文教大学教育学部学校教育課程

各事例地域を検討する際，それぞれの地方における外国語使用の現状についてもふれていくこととする．なお，本稿中の統計数値は，基本的に INSEE の調査が行なわれた 1999 年時点のものである．

各事例の検討に入る前に，フランスにおける言語政策の変遷について簡単にみておきたい．1539 年，フランソワ 1 世が発布したヴィレール - コトレの勅令により，フランス国内の公式文書では，ラテン語にかえてフランス語の使用が義務づけられた[7]．さらに，フランス革命の際，「方言」の一掃とフランス語への言語統一が急務とされ[8]，その後一貫して中央集権的な言語政策が推進されてきた．とりわけ，19 世紀末期以降における教育の浸透と，第二次世界大戦後におけるマスメディアの普及は，地域言語を排除する上で現実的な効果があった[9]．

他方，第二次世界大戦以降，フランスでは徐々に地方分権的な政策もとられるようになってきた．本稿で事例地域の枠組とした「地方」région に自治体としての地位が付与されたのは 1972 年であり，1982 年には地方分権法が制定されてその自治体としての権限が強化された．こうした流れをうけ，1970 年代以降，地域言語は公立学校での選択科目や大学入学資格試験（バカロレア）の科目として認められるようになり，ラジオやテレビでも地域言語での番組が放送されるようになった[10]．

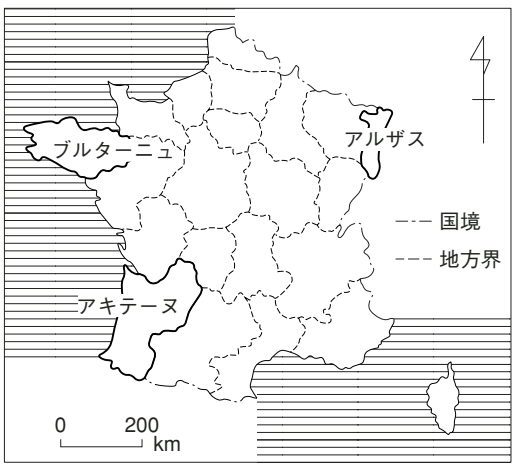

図 1　対象事例地域の位置
（基図として，LE BOËTTÉ（2003），p.20 を使用）

このような地方分権的政策は，国内各地の地域主義運動とも大きく関わっている．ことにフランスの場合，地域主義運動を，従前の中央集権的政策に対する反動としてとらえることも可能である．次章以下では，地域文化の重要な一翼を担う地域言語が，各地方でどのように展開し，どのような現状にあるのかを検討していくことにする．

Ⅱ　アルザス地方の事例

(1) 沿革

図 1 にみられるように，アルザス地方はフランスの東部に位置し，ドイツおよびスイスと国境を接している．アルザス語の歴史については，すでに前稿で詳しく述べたため，ここではその概略のみを記すこととしたい．

アルザスは，三十年戦争後の 1648 年にフランス領となり，その後，たびたびフランスとドイツの間で帰属が争われてきた．すなわち，1871 年の普仏戦争終結によってドイツ領，1918 年の第一次世界大戦終結によってフランス領となり，第二次世界大戦中のドイツによる占領を経て，第二次世界大戦後，三たびフランス領となって今日に至っている．

ゲルマン語系ドイツ語の一地方語であるアルザス語は，長らくアルザスの主要言語であった．18 世紀から 19 世紀にかけてアルザスでみられた文芸活動の興隆期には，科学や詩文の分野でドイツ語が優勢であった．しかし，その一方で，19 世紀に入ると教育や兵役によってフランス語も浸透するようになり，1850 年頃からはフランス語が優位に立つようになった[11]．普仏戦争直前のアルザスでは，フランス語識字率がフランス国内で上位にあったことが指摘されている[12]．

第一次世界大戦以降，フランスの中央集権的政策により，アルザスのフランス語化が推進されてきた．とくに，第二次世界大戦後は，ナチ統治へ

の反動もあり，アルザス語はいわば「敵性言語」の扱いをうけてきた．もっとも，近年では，序章で述べたような地方分権的政策や地域主義運動によって，アルザス語の存在が見直されつつある．

(2) 現状

前稿において，INSEE の調査結果から得られたアルザス語の現状について，以下のような指摘を行なった．それによると，アルザス語の使用率が高いのは，出生地別ではアルザス出身者，世代別では高年層，職業別では農民，居住地別では村落部であった[13]．

図 2 は，出生年代ごとにみたアルザス語使用の推移を居住地別に示したものである[14]．これによると，1950 年頃までに生まれた世代では居住地に関わらず，アルザス語の使用割合が 60 %前後の高い値を示している．これには，1940 年代前半にアルザスがドイツの支配をうけたことも関連しているとみられる．その後，使用割合はとくに都市部で急落し，1980 年生まれでは 20 %以下となっている．アルザスの人口（約 173 万）のうち，ストラスブール（約 41 万）・コルマール（約 9 万）・ミュルーズ（約 23 万）の人口はその半分弱（約 42 %）を占めており，都市部でアルザス語使用率が低下したことは，アルザス全体のアルザス語使用にも大きな影響を与えているとみられる．一方，アルザス北部では，アルザス語の使用率は漸減傾向にとどまり，1980 年生まれでも 50 %強の割合を維持している．これは，アルザスの中でもとくに北部で住民のゲルマン的性格が強まるという従来の指摘と一致する[15]．

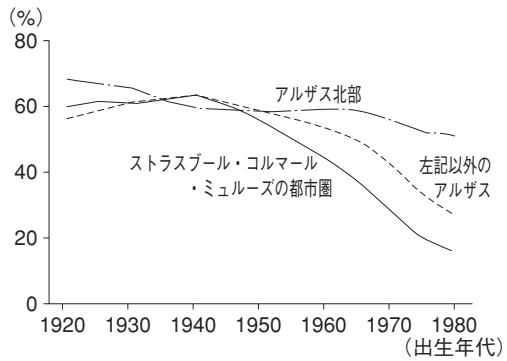

図 2　アルザス出身者のうちアルザス語使用者の割合
－ 1999 年－　　（DUÉE（2002），p.5 による）

アルザスにおけるフランス語以外の言語使用の現状について示したのが表 1 である．39.0 %というアルザス語の使用率は，次章以下でみる他地方での地域言語の使用率に比してかなり高率であり[16]，現在でもアルザス語が一定の地位を占めていることが理解できる[17]．これと関連して注目されるのはドイツ語の使用率が 16.2 %に達している点である．以上のようなアルザス語およびドイツ語の使用率は，EU 統合にともない，通勤・買い物などの面でドイツやスイスとの交流が密接になり[18]，アルザス語やドイツ語の使用頻度が高くなってきていることを意味している．

アルザスに居住する外国人として最も多いのはトルコ人（約 2.9 万）であり，次いでドイツ人（約 1.6 万）である[19]．フランスの他地方と比較したとき，アルザスではトルコ人が多いのが特徴となっており，これが表 1 の外国語中，トルコ語が第 5 位にあらわれる理由となっている．また，アルザスにおけるトルコ語使用者の割合は 1.3 %で，フランス全土の 0.3 %に対して高くなっている[20]．周知のごとく，ドイツにはトルコ系移民が多数居住しており[21]，その影響がアルザスにもあ

表 1　アルザスにおける言語使用（フランス語以外）
－ 1999 年－

言語名	使用人数	使用率
アルザス語	500,000	39.0
その他フランスの地域言語	13,300	1.0
ドイツ語	208,000	16.2
英語	75,200	5.9
アラブ語	29,200	2.3
イタリア語	27,600	2.2
トルコ語	16,200	1.3
スペイン語	15,300	1.2
ポルトガル語	13,200	1.0
その他	33,600	2.6

注）使用人数・使用率とも 18 歳以上．
（DUÉE（2002），p.3 による）

られているものと考えられる．

Ⅲ　アキテーヌ地方の事例

(1) 沿革

アキテーヌ地方は，フランスの西南部に位置し，ピレネー山脈を隔ててスペインと国境を接している（図1参照）．

アキテーヌは，中世にイングランド（プランタジネット朝）の支配下におかれた後，百年戦争後の1453年にフランス領となった．ただし，アキテーヌでは都市を中心とした地域の形成が進まず，この地方は組織だった構造をもたない混沌とした領域であり続けた．中心都市のボルドーが大西洋の海上交通を基盤としていたことも，アキテーヌに対する遠心力として作用した[22]．

アキテーヌにおける地域言語としてはオクシタン語とバスク語をあげることができる．オクシタン（オック）語は，フランス南部で広く用いられてきたロマンス系の地域言語であり[23]，中世の吟遊詩人（トルバドゥール）に代表される長い歴史を有するものの，北方のオイル語が標準フランス語の地位を獲得するにつれて，その地位は徐々に低下してきた．16世紀には，印刷術の発展と相まって，オクシタン語による文芸活動の興隆がみられたが，その興隆は短期間のものにとどまり，オクシタン語地域の文化的再生には19世紀のオック語再生運動（フェリブリージュ運動）をまたねばならなかった[24]．

もう一方のバスク語は，非インド＝ヨーロッパ語族の言語で，スペインのバスク地方とまたがって存在している．バスク語地域でも16世紀から17世紀にかけて詩を中心とした文学や演劇が盛んになった．その後，地域文化は停滞したが，19世紀にスペイン側のバスク地方で地域主義的な動きが高まったことをうけて，フランス側でもバスク社会に対する関心が増大した．また，バスク地方では，識字化進行の遅れや徴兵に対する召集忌避率の高さ，南北アメリカへの活発な移住現象など，この地方特有の社会的動向がみられた[25]．

(2) 現状

表2は，INSEEの調査によって，アキテーヌにおける言語使用の現状（フランス語を除く）をまとめたものである．この調査結果によると，オクシタン語はアキテーヌ地方に属する5県で広く用いられているのに対し，バスク語はバスク地方という狭い範囲のみで使用されているという特徴がある．そのため，オクシタン語の使用人数は，バスク語の2倍強に達している．職業別では両地域言語ともに農民の使用率が高く（オクシタン語30％，バスク語17％），結果として農村部で使用されることが多くなっている[26]．

バスク地方を除くアキテーヌについて，オクシタン語の伝達割合の推移を図3に示した．これによると，すでに両大戦間期からオクシタン語の日常的な伝達割合は急落しており，1945年以降，その数字は5％未満で推移している．また，時々伝達するという割合も，第二次世界大戦後は漸減傾向にある．このため，約16.1万人いるアキテーヌのオクシタン語使用者（表2参照）のうち，3分の2は65歳以上の高齢者が占めている[27]．

これに対し，バスク地方におけるバスク語の伝達割合の推移をあらわしたのが図4である．バス

表2　アキテーヌにおける言語使用
（フランス語以外）　－1999年－

言語名	使用人数	使用率
オクシタン語	160,600	7.2
バスク語	73,800	3.3
その他フランスの地域言語	17,200	0.8
スペイン語	121,000	5.4
英語	112,200	5.0
アラブ語	42,400	1.9
ポルトガル語	31,100	1.4
ドイツ語	16,300	0.7
イタリア語	16,200	0.7
その他	27,700	2.0

注）使用人数・使用率とも18歳以上．
（DEGUILLAUME et AMRANE（2002），p.1による）

ク語が日常的に伝達される割合は，1915 年生まれの約 40 %から 1975 年生まれの約 20 %へと半減したが，上のオクシタン語に比べるとその数字は相当高く保たれている．時々伝達するという割合が漸増していることと合わせ，バスク語は現在も維持の方向にあるとみることができる[28]．その理由の一つとして，バスク語の使用が比較的狭い範囲に凝縮されているため，その範囲内での伝達が高い密度で行なわれてきたことが考えられる．また，スペイン側のバスク地方で近年盛んになってきている地域主義運動がフランス側に影響を与えている点も見逃せない[29]．

一方，表 2 の外国語で最も使用割合が高いのはスペイン語（5.4 %）である．これには，1930 年代のスペイン内戦中，アキテーヌにスペイン人が大量に流入したことが影響している[30]．しかし，

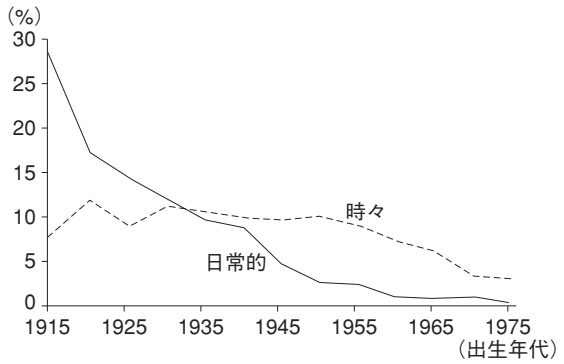

図 3　アキテーヌにおけるオクシタン語伝達割合の推移（バスク地方を除く）
（DEGUILLAUME et AMRANE（2002），p.3 による）
注）1915 年以前の世代は，1915 年に含まれる．

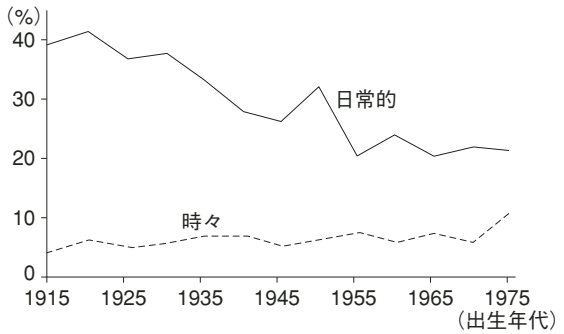

図 4　バスク地方におけるバスク語伝達割合の推移
（DEGUILLAUME et AMRANE（2002），p.4 による）
注）1915 年以前の世代は，1915 年に含まれる．

そうした状況があるにも関わらず，アルザスのドイツ語と比較するとその使用割合は高くない．このことは，同じ EU 統合という流れの中にあっても，フランスとスペインの交流が，フランスとドイツほど密接とはなっていないことを物語っている[31]．

Ⅳ　ブルターニュ地方の事例

(1) 沿革

ブルターニュはフランス西北部に突き出した半島部に位置しており，北のイギリス海峡と南の大西洋（ビスケー湾）に挟まれている（図 1 参照）．

ブルターニュには，4 世紀末期以降，グレート＝ブリテン島からケルト系のブルトン人たちが多数来住した．9 世紀から領邦が形成され，フランス西北部の広い範囲を支配したこともあったが[32]，最終的には 1532 年にブルターニュ公国はフランスに編入された．

このブルトン人たちが持ち込んだケルト語系の言語がブルトン語であり，同じケルト語系に属する言語としてはウェールズ語とゲール語（スコットランド・アイルランド）がある．ブルトン語の使用地域が最も拡大したのは 9 世紀で，上述の領邦の範囲よりは狭かったものの，ナントやレンヌの近辺にまで達していた．10 世紀以降，ブルトン語使用地域は西方へ後退したが，18 世紀末まではブルターニュ半島のほぼ全域でブルトン語が用いられていた[33]．

ブルターニュでは，16 世紀に書き言葉によるブルトン語の文芸活動がみられたものの，17・18 世紀には出版が停滞した．ブルトン語地域の文化再生運動は，フランスのケルト的起源に対する関心と，イギリスにおけるケルト研究の再生をうけ，19 世紀以降に活発化した[34]．

一方，上流階級の言語として中世からもっぱら用いられていたフランス語は[35]，19 世紀末期以降の学校教育の普及とともに，より広い範囲に浸透していくようになった．その結果，ブルトン語

の推定使用人口は，1905年の140万から，1962年の68.6万，1991年の25.0万へと急減した[36]．

(2) 現状

INSEEの調査によって，ブルターニュにおける言語使用の現状（フランス語を除く）を示したものが表3である．ブルトン語の使用人数は25.7万であり，上記の1991年の推定使用人口とほぼ一致している．12.0％という使用率は，前述のアルザス語よりは低いが，オクシタン語およびバスク語よりは高くなっている．なお，ブルターニュでは，ブルトン語のほかに，オイル語系のガロ語という地域言語がみられる[37]．

さらにブルトン語について詳しくみると，職業別では農民（30％）や労働者（14％）で使用率が高くなっている[38]．また，地域別にみると，図5からわかるように，ブルターニュ半島の西方に行くほど，ブルトン語の使用率が高くなる．すなわち，半島の先端部にあたるフィニステール県（20％）をはじめ，ブルターニュ地方の西部3県の使用率が10％以上であるのに対し，同地方の東部に位置するイル‐エ‐ヴィレーヌ県では2％未満である．こうした分布の一因としては，前節で述べたように，歴史的にブルターニュの西部ほどブルトン語が浸透していたことがあげられる[39]．

ブルトン語の伝達割合は，他の地域言語と同様に減少傾向にある．上記の西部3県についていえば，1920年代生まれでは伝達割合が60％であったが，1980年代生まれになると6％に低下しており，伝えられたとしても，時々伝達される程度になっている．この結果，ブルトン語の使用者のうち，4分の3が50歳以上，2分の1が65歳以上となっている[40]．

もっとも，近年では，これまでの家族による伝達にかわって，学校やメディアによるブルトン語の伝達がなされるようになってきている[41]．序章で述べたような地域主義運動はブルターニュにおいても盛んになってきており，とくに音楽の分野では，ウェールズ・スコットランド・アイルランドなどを合わせた「ケルト文化圏」の形成が顕著であり，ブルターニュの伝統的祭礼は現代の観光資源としても重要な意義を有している[42]．フランス語との二言語併記による地名表示も広まり[43]，ブルトン語入門用にブルトン語によるブルターニュの地図も作成されている[44]．

他方，表3の外国語では，英語の使用率が最も高いが，その割合はアルザスやアキテーヌの英語と同程度である．INSEEの調査結果によれば，ブルターニュにおける英語は主に学校で習得するものであり，その使用率はブルターニュの中心都

表3　ブルターニュにおける言語使用
（フランス語以外）　－1999年－

言語名	使用人数	使用率
ブルトン語	257,000	12.0
ガロ語	28,300	1.3
その他フランスの地域言語	8,200	0.4
英語	111,600	5.2
スペイン語	24,300	1.1
ドイツ語	18,000	0.8
イタリア語	5,700	0.3
アラブ語	5,000	0.2
ポルトガル語	4,500	0.2
その他	16,000	0.7
合計	428,000	20.0

注）使用人数・使用率とも18歳以上．多言語併用者がいるため，合計の数字は単純な総計とはならない．
（LE BOËTTÉ（2003），p.18による）

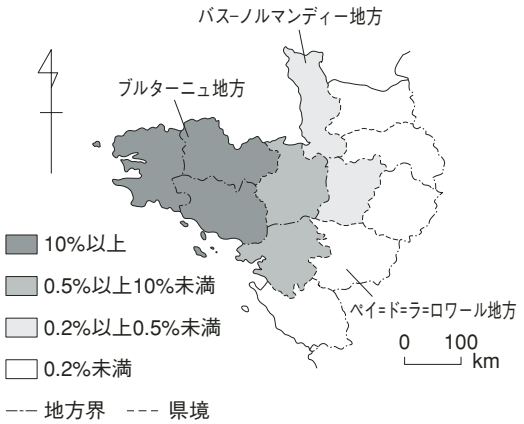

図5　ブルトン語の県別使用割合　－1999年－
（LE BOËTTÉ（2003），p.20による）

市であるレンヌがあるイル - エ - ヴィレーヌ県で6.3 %と比較的高い．ブルターニュでは，人口の76 %が同地方内の出身であり，外部からの人口流入が相対的に少ないため[45]，アルザスのドイツ語やアキテーヌのスペイン語のような顕著な外国語の存在はみられない．

V　おわりに

アルザス・アキテーヌ・ブルターニュの3地方を事例とし，フランスにおける地域言語の推移と現状について検討してきた．各地方の事例は，以下のようにまとめられる．

アルザス地方は，度重なる領土変更という事情もあり，歴史的にドイツの影響を強くうけてきた．そのため，村落部を中心として，今日でもアルザス語の使用率が高い．さらに，近年では，EU統合の進展にともない，アルザス語やドイツ語の使用に新たな意義が見出されつつある．

他方，まとまった地域構造をもたない範域であったアキテーヌ地方では，オクシタン語とバスク語という2つの地域言語が存在している．今日では，比較的広範囲で用いられているオクシタン語の使用が減少傾向にある一方，使用範囲が限定的であるバスク語は，スペイン側バスク地方における地域主義運動の影響もあって，存続する方向にある．

また，ブルターニュ地方では，ケルト系住民の移住によって中世には領邦が形成された．その後，フランスに統合される中で地域言語であるブルトン語も衰退傾向にあったが，地域主義運動の高まりをうけて，最近では学校やメディアを通してのブルトン語伝達もみられるようになっている．

ここで事例として取り上げた3地方は，フランスという国の領域の中でいずれも周縁部に位置している．そのため，長らく中央集権的政策をとってきたフランスにおいて，こうした周縁部のもつ地域文化はともすれば冷遇される傾向にあった．ここで取り上げたいくつかの地域言語に関しても，20世紀の間に使用人口がかなり減少してきたことは否めない．

しかしながら，EU統合の進展によって国家や国境の性格に変化がみられつつある現在，それぞれの地域文化の核ともいえる地域言語はさまざまな形で見直されつつある．ただし，そのありようは地域によって多様である．本稿の事例に即していえば，ドイツやスイスとの密接な交流がみられるアルザスに対し，アキテーヌではスペインの影響が現時点でみる限りより間接的な形にとどまっており，ブルターニュでは海を越えたイギリスやアイルランドのケルト系地域との連携が模索されている．

さらに各章でふれた外国語の存在も合わせ，「一国家一言語」を旨としてきたフランス式国民国家の形は確実に変容しつつある．そして，このような言語をめぐるフランスの現状は，他の西ヨーロッパ諸国や日本の状況との比較対照によって，より理解を深めることができるように思われる．この点については，今後の調査・研究の中で検討していきたい．

付記

本稿は，2005年度科学研究費補助金（海外学術調査）「ヨーロッパ中軸地帯におけるトランスボーダー都市の空間動態」（課題番号17401030）による成果の一部である．代表者の筑波大学地球環境科学専攻，手塚　章先生をはじめとする調査メンバーの皆様には，さまざまな形でお世話になりました．本稿の骨子は，2007年5月の歴史地理学会第50回大会（於：国学院大学）で発表し，その際，諸先生方から多くのご助言をいただきました．以上，記して深く感謝申し上げます．

注

1）宮島　喬（2004）：『ヨーロッパ市民の誕生　－開かれたシティズンシップへ－』，岩波新書，p.22.

2）T. G. ジョーダン - ビチコフ・ B. B. ジョーダン著，山本正三・石井英也・三木一彦訳（2005）：『ヨーロッパ　－文化地域の形成と構造－』，二宮書店，

pp.182-184.

3）内藤正典（2004）:『ヨーロッパとイスラーム　－共生は可能か－』，岩波新書，pp.131-132.

4）柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦編（1995）:『世界歴史大系　フランス史 3　－ 19 世紀なかば～現在－』，山川出版社，p.436.

5）三木一彦（2003）:「アルザスにおける言語の現状とその地域性」，文教大学教育学部紀要 37，pp.113-124.

6）Francois HÉRAN, Alexandra FILHON et Christine DEPREZ（2002）：La dynamique des langues en France au fil du XXe siécle, *Population et société* 376, p.4 によれば，フランス国内のアルザス語使用人口（成人）は 54.8 万，同じくオクシタン語は 52.6 万，ブルトン語は 30.4 万と推計されている．

7）田中克彦（1981）:『ことばと国家』，岩波新書，pp.89-91．なお，ヴィレール - コトレは，ピカルディー地方エーヌ県南西部に位置する町である．

8）こうした考え方は，例えば，バレールの「方言とフランス語の教育にかんする報告と法案」（1794 年）にみることができる．コンドルセほか著，阪上　孝編訳（2002）:『フランス革命期の公教育論』，岩波文庫，pp.261-276.

9）アンリ＝ジオルダン編，原　聖訳（1987）:『虐げられた言語の復権　－フランスにおける少数言語の教育運動－』，批評社，p.14.

10）前掲 4)，pp.442-443.

11）グザヴィエ＝ド＝プラノール著，手塚　章・三木一彦訳（2005）:『フランス文化の歴史地理学』，二宮書店，p.396.

12）前掲 11)，pp.193-194．その理由として，アルザスが経済的に豊かな集村地域であったことがあげられている．

13）前掲 5)，pp.119-120.

14）Michel DUÉE（2002）：L'alsacian, deuxième langue régionale de France, *Chiffres pour l'Alsace* 12, p.5.

15）フレデリック＝オッフェ著，宇京頼三訳（1987）:『アルザス文化論』，pp.46-47.

16）前掲 14)，p.3 によれば，この数字はコルス地方におけるコルス語使用率（45 %）に次ぐ高率である．

17）前掲 5)，pp.117-118 において，アルザス語の使用および子供への伝達の割合が他の地域言語よりも高かったことを述べた．

18）前掲 2)，p.214 によれば，アルザスに隣接するドイツのバーデン地方は経済的にみて相対的に繁栄しており，このことがフランス人のドイツ側への通勤が多くなる理由となっている．なお，アルザスとドイツおよびスイスとの交流を取り上げた近年の研究例として，伊藤貴啓（2003）:「バーゼル国境地域における越境地域連携とその構造」，地理学報告 97，pp.22-46，および，手塚　章（2006）:「国境都市からトランスボーダー都市へ（1）：ストラスブールの事例」，人文地理学研究 30，pp.113-125，があげられる．

19）手塚　章（2003）:「ヨーロッパ中軸国境地帯における空間組織の変容　－アルザス・ロレーヌ地方を中心として－」，人文地理学研究 27，p.40.

20）前掲 14)，p.3.

21）前掲 3)，p.24 によれば，2003 年の時点でドイツには約 260 万人のトルコ国籍保有者がいる．

22）前掲 11)，pp.225-227.

23）オック語系の一方言として扱われる狭義の「オクシタン語」という概念も存在するが，ここでは INSEE の調査における分類に従い，オクシタン語とオック語を同義のものとして扱う．

24）前掲 11)，pp.397-400，403-404.

25）前掲 11)，pp.400-401，404-405，408-409.

26）Colette DEGUILLAUME et Éric AMRANE（2002）：Langues parlées en Aquitaine: la pratique héritée, *Insee Aquitaine* 110, pp.1-2.

27）前掲 26)，p.3.

28）前掲 26)，p.4.

29）前掲 1)，p.11 によれば，スペイン側バスクの援助をうける形で，1990 年代にフランス側バスクでもバスク語学校が出現した．なお，スペイン側バスクにおけるバスク語の展開や現状については，渡部哲郎（2004）:『バスクとバスク人』，平凡社新書，pp.159-198，に詳しい．

30）前掲 26)，p.5.

31）前掲 2)，pp.437-438 によれば，フランスとドイツの間の姉妹都市関係が 1,500 に上るのに対し，フランスとスペインの間では 134 しかない．

32）前掲 11)，pp.108-110.

33）前掲 11)，pp.109-110.

34）前掲 11)，p.400，404.

35）前掲 11)，p.400.

36）グランヴィル＝プライス編，松本克己編訳，山本秀樹・佐々木　冠・山田久就訳（2003）:『ヨーロッパ言語事典』，東洋書林，p.457.

37）Isabelle LE BOËTTÉ（2003）:Langue bretonne et autres langues: pratique et transmission, *Octant* 92, p.19.

38）前掲 37)，p.21.

39）前掲 37)，pp.19-20.

40）前掲 37)，pp.20-22.

41）前掲 37)，p.22.
42）原　聖（2003）:『世界歴史選書　＜民族起源＞の精神史　－ブルターニュとフランス近代－』，岩波書店，pp.220-222.
43）前掲 2)，p.155.
44）ブルターニュ言語事務局 Office de la langue bretonne 発行.
45）前掲 37)，pp.18-19.